

心疾患による致死性不整脈が心配な人は……

体内に「AED機能」植え込む治療が確立



ICD治療の第一人者 福田浩二先生

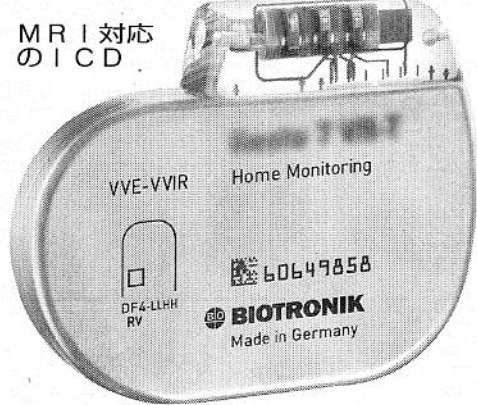
40〜50代にもなると、ほとんどの人に多かれ少なかれ不整脈があるといふ。その不整脈の中でも治療が遅れると死に至るものを「致死性不整脈」と呼んでいるが、もしこの危険な不整脈が突然起きてしまった場合の手だてはあるのだろうか。

「心臓の疾患はさまざまあり、心筋梗塞や心筋症の中には、致死性不整脈を合併する場合があります。心筋梗塞は、ご存じのように心臓の血管が詰まってしまうことで、心臓のポンプの効率が低下し、心臓の筋肉が肥大化したり、薄く伸びたりして動きが衰えてしまふことがあります。このほかブルガダ症候群のような致死性不整脈のみを特徴とする疾患もあります」と、東北大学病院循環器内科の福田浩二医師は話す。

致死性の不整脈で突然死が心配される場合は、ICD（植込み型除細動器）を体内に入れる治療が確立されているといふ。「公共施設に設置されているAEDは、外側から電気ショックをかけて危険な不整脈を止める機械ですが、ICDは、体内に植え込んでおくようなもの。危険な不整脈が起こったことを察知すると、自動的に電気ショックを起こして、不整脈を止める働きをしてくれまふ」（福田医師）。

ペースメーカーによって心臓のポンプの効率を改善する治療法をCRT（両室ペーシング）という。CRT治療を受ける患者さんは、致死性不整脈を合併する頻度が高いため、CRT機能を備えたICDが必要になるケースも多い。それがCRT-D（両室ペーシング機能付き植込み型除細動器）である。

弱点も克服…胸部除くMRI検査対応可能に



MRI対応のICD

このAEDをあらかじめ体内に植え込んでおくようなもの。危険な不整脈が起こったことを察知すると、自動的に電気ショックを起こして、不整脈を止める働きをしてくれまふ」（福田医師）。

ペースメーカーによって心臓のポンプの効率を改善する治療法をCRT（両室ペーシング）という。CRT治療を受ける患者さんは、致死性不整脈を合併する頻度が高いため、CRT機能を備えたICDが必要になるケースも多い。それがCRT-D（両室ペーシング機能付き植込み型除細動器）である。

脳疾患やがんの診断にメリット

福田医師は「危険な不整脈だけに対処するのがICD。重症の心不全の治療も一緒にできるのがCRT-Dだと捉えれば、分かりやすいのではないだろうか」と語る。だが、ICDやCRT-Dには弱点もあった。磁気に弱いためにMRI検査ができなかったのだ。しかしながら、昨年10月にMRI対応のICD、CRT-Dが保険適用となり、胸部を除く部位のMRIが可能になった。「脳の疾患やがんの病変を診断するために、MRIによる検査は欠かせません。ICDを植え込んでもMRIが受けられるようになったのは、メリットは、とても大きいですね」（福田医師）。

これからはMRI対応のICD、CRT-Dが主流となっていくだろう。

昨年から保険適用

得する情報

得する情報